

私立大学研究ブランディング事業

平成30年度の進捗状況

学校法人番号	231020	学校法人名	愛知医科大学		
大学名	愛知医科大学				
事業名	健康維持・増進を支える次世代先制地域医療：炎症評価コホート研究				
申請タイプ	タイプA	支援期間	3年	収容定員	1078人
参画組織	医学部、看護学部、大学院医学研究科、大学病院、分子医科学研究所、運動療育センター、研究創出支援センター				
事業概要	<p>本事業では、若年者率全国1位、出生率3位を誇る「活力のある若いまち」長久手市との親密な連携関係を基盤に、炎症に関する学内研究を推進して健康状態の客観的評価法を確立するとともに、長久手市職員対象のコホート研究を展開する。これらの研究成果を基に、全年齢層に対応する「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療」システムを構築する。本事業の達成を通じて、健康長寿社会の実現に貢献する大学としての使命を果たす。</p>				
①事業目的	<p>日常生活において、医療機関を受診するほどではないが、何となく体調不良や疲労を感じることもある。また、数多くの疾患は突然発症するのではなく必ず予兆があるが、多くの場合は、炎症反応が生体に生じている。本人が気づかない炎症反応を数値として示すことによって、健康状態を客観的に評価できれば、健康増進へ向けての具体的な方策が立ち、迅速な対処によって疾患の発症を食い止めることができる。</p> <p>本事業の目的は、健常者に潜在する炎症反応の解析を通じて健康状態の客観的評価指標の決定と評価法の確立を行い、特定の因子と疾病発症率との関連を明らかにするコホート研究を「活力のある若いまち」長久手市に立ち上げ、両者の遂行によって「健康維持・増進を支える次世代先制地域医療」システムを構築することである。健康な若い市民の比率が高い同市との協力でしか達成できない研究であり、その成果は未来の健康長寿社会の実現に繋がるといえる。</p>				
②平成30年度の実施目標及び実施計画	<p>■学内基礎研究とコホート研究 目標①：学内全体への本事業の周知し、学内研究組織を立ち上げ、研究を開始する。 目標②：長久手市職員に対するコホート研究を開始し、アンケート調査及び採血を実施する。</p> <p>■ブランディング戦略の目標 目標A：本事業開始時に本学に関するアンケート調査の実施し、本学の認知度とイメージを確認する。 目標B：キックオフシンポジウムを開催する。 目標C：様々な方法で広報活動を展開する。</p>				
③平成30年度の事業成果	<p>採択の結果を受けて、本学における研究の実施に係る全学的な事項を審議するための会議体である研究戦略会議を開催し、ブランディング事業の実施体制の確認を行い、実施期間短縮に伴う事業内容の見直しに関して検討した。</p> <p>■学内研究とコホート研究 目標①：学内全体に本事業採択を周知し、研究戦略会議の議論に基づき、本学のブランド化に向け、学長のリーダーシップのもと教員及び関連部署の事務職員で構成した実務者会議を設置し、学内研究組織の大まかな枠組みを作り、学内研究公募への取り組みを進めた。また、学内研究体制の基盤整備のため研究創出支援センターにフリーズ超低温槽を、医学部総合医学研究機構（高度研究機器部門）にリアルタイムPCRを整備した。 目標②：当初目標としていたアンケート調査と採血の実施には至らなかったが、長久手市役所職員と打合せを実施し、市役所職員へのコホート研究、市民へのアプローチ方法等について意見交換を行った。</p> <p>■ブランディング戦略 目標A：アンケート内容の検討を開始した。 目標B：キックオフシンポジウムの内容と日程に関して検討を開始した。 目標C：学外への情報発信として、本ブランディング事業のホームページを開設し、閲覧者の目に留まるようにトップページにリンクを整備した。</p>				

	<p>(自己点検・評価) 研究戦略会議及び私立大学研究ブランディング事業実務者会議において、自己点検・評価を行った。 ・平成30年度については、当初の目標達成の準備段階として、学内研究組織の枠組みを始めとした根幹となる方針を確認し、事業の推進を加速する具体的な手立てに関しても検討することができた。 ・長久手市とのコホート研究開始には至らなかったが、同研究に向けて有意義な意見交換を行うことができた。 ・研究創出支援センターのバイオバンク部門の充実の一環として、フリーズ超低温槽を整備することができ、コホート研究実施へ向けた整備が進んだ。 ・情報発信としては、ホームページの開設のみであったため、更なるホームページ内容の充実及び他の情報発信手段の実施が必要である。</p>
<p>④平成30年度の自己点検・評価及び外部評価の結果</p>	<p>(外部評価) ・開始年度ということもあり、全体として取組みに遅れが感じられるが、学内組織の立ち上げ、対象職員との意見交換、保存用冷凍庫、解析機器の整備などの進展も見られる。同事業の課題である生体内の炎症は、様々な疾患、特に老化との関連で注目されており、健康長寿実現を目指した魅力的なものと評価できる。 ・バイオバンクは医学系分野において、研究及び産学連携の観点から極めて重要である。愛知医科大学は、ブレインバンクを始めとして先端を走っているが、更なる充実に向け、近隣の施設、大学等と協働して包括的なバイオバンクの樹立にも期待する。 ・本事業は若年者率全国1位という特徴をもつ長久手市において、愛知医科大学が保有する高い研究能力を適用するものであり、多くの成果が期待される。 ・炎症は個体年齢や臓器によって極めて多様な特性をもつ生物反応であるため、今後、それらの解析方法に関し、他機関と連携した検討が加えられれば良いと思う。健康長寿と炎症との関係を議論するに当たっては、すでに高齢化が進んだ地域での横断研究も対称軸として検討に加えることを期待したい。 ・ブランディング戦略面では、ホームページの更なる充実が望まれる。</p>
<p>⑤平成30年度の補助金の使用状況</p>	<p>本事業に係る研究費としてリアルタイムPCR及びフリーズ超低温槽を整備した。事業実施に当たり執行した経費は、学内ルールに従い適切に執行した。</p>